第69回大阪府高等学校演劇研究大会（地区大会）参加作品

青二才

上演許可→narifuri_kamawazu0613@yahoo.co.jp

原案　宮崎愛（ＯＧ）
作　横川良明（ＯＢ）

大阪府立東住吉高等学校演劇部

■キャスト

佐藤
鈴木
高橋
田中
伊藤
渡辺

その他たくさんの登場人物

【第1話】「不快にさせてしまって申し訳ありません」

人影が一列になって頭を下げている。

一同　　このような事態を招いてしまい申し訳ございません。

フラッシュの放列。高鳴る音楽。その輪から佐藤が外れる。

佐藤　　何でこの人謝ってるの？

そのひと声と共に場所が変わる。

そこは、佐藤家のリビング。朝の風景。母とテレビを見ながら朝食をとっている佐藤。流れているのはワイドショー。

佐藤の母　何が？

佐藤　　これ、昨日の事故、保育園の。

佐藤の母　ああ。どうなったの？

佐藤　　何が？

佐藤の母　ひとり意識不明の子がいたでしょ。

佐藤　　わかんない。

佐藤の母　可哀相よね。まだ小さいのに。

佐藤　　でもさ、悪いのは車運転してた方でしょ。

佐藤の母　そらね。

佐藤　　じゃあ、何で保育園の方が謝らなきゃいけないの？

佐藤の母　そりゃ、誰かが謝らないと丸くおさまらないからでしょ。

佐藤　　えー。

佐藤の母　ほら、もう時間でしょ。早く行きなさい。

すると、場面は佐藤の通学風景に。

佐藤　それは、まだ中学の頃の話です。うちの中学には週に一度、金曜の６時間目にロングホームルームがあります。他のクラスは体育祭の係を決めたり、合唱大会の練習にあてたり、テスト前は自習の時間だったり、そんな他愛のない感じなんですけど、うちのクラスは担任の先生のひと声で、なかよしの会という会が開かれるようになりました。

気づくと、生徒たちがまるで裁判のように椅子に座って対面している。佐藤はさながら議長のポジションでクラスメイトたちに向けて声をあげる。

佐藤　それでは、今週のなかよしの会を始めます。何か意見がある人は挙手してください。

生徒Ａ　（手を挙げて）はい。

佐藤　はい、中村さん。

生徒Ａ　掃除当番についてなんですけど、陸上部の小林さんが今週もサボっていたんですけど、どうにかしてください。

生徒Ｂ　はあ？　ちゃんと代わりの子にお願いしたけど。

生徒Ａ　前回もその前も代わってもらってましたよね？　結局一回も自分でやってないのはずるいと思います。

生徒Ｂ　しょうがないじゃん。部活なんだから。

生徒Ａ　部活だからって特別扱いしてたら不公平だと思います。結局、同じ子がずっとやる羽目になるんだから。

生徒Ｂ　その子がいいって言ってんだからそっちが口をはさむことじゃなくね？

生徒Ａ　小林さんが怖くて嫌って言えないだけじゃないんですか。

生徒Ｂ　はあ？

佐藤　では決をとります。これからは部活であってもちゃんと自分の当番は自分でやった方がいいと思う人、挙手をしてください。

大多数が手を挙げる。

佐藤　では、多数決により今後部活による掃除当番の代理は認めないということで決定しました。小林さん、これまで迷惑をかけたみんなに謝罪をしてください。

生徒B　今まで自分の勝手な理由で掃除をサボってすみませんでした。これからはちゃんと自分の当番は自分でやります。

一同　はい、わかりました。

生徒たち、散り散りになる。

佐藤　こんなふうにクラスの中で問題になっていることをみんなで話し合い、解決をするのがなかよしの会の目的です。

佐藤は学級日誌を持って担任のもとへ向かう。

佐藤　失礼します。先生、今日の日誌です。

担任　ありがとう。どうだった、なかよしの会は。

佐藤　小林さんと中村さんがちょっと言い合いになっちゃったんですけど、小林さんも最後は自分が悪かったことを素直に認めて、謝ってくれました。

担任　そう、良かった。本当、佐藤さんが委員長をやってくれたおかげで、先生、すごく助かる。

佐藤　ありがとうございます。

担任　佐藤さんはどうして先生がこのなかよしの会をみんなにやらせているのか、理由ってわかる？

佐藤　え。クラスのまとまりをつくるため、ですか？

担任　それもあるかな。でもね、本当の理由は、みんなに正しい大人になってほしいの。

佐藤　正しい大人。

担任　人間だもの。誰でも間違ったり悪いことをしてしまうときはあると思う。

佐藤　はい。

担任　そのときにちゃんと自分の非を認めて、謝ることができるのが大事なの。先生は、みんなにそういう正しい大人になってほしいんだ。

そして、佐藤はまた教室へ。今日もなかよしの会が始まる。

生徒Ｃ　加藤くんがコーヒーだけやたらいい発音でカフィーと言うのが気になって仕方ないので、やめてください。

生徒Ｄ　正しくはカフィーだからいいと思います。

生徒Ｃ　じゃあ普段バナナはなんて発音しますか？

生徒Ｄ　（普通に）バナナ。

生徒Ｃ　トマトは何て発音しますか？

生徒Ｄ　（普通に）トマト。

生徒Ｃ　コーヒーは？

生徒Ｄ　カフィー。

生徒Ｃ　ものすごくイラっとします。

佐藤　加藤くん、コーヒーをカフィーと発音するのは日本人的にイラっとするからやめてください。

生徒Ｄ　今までコーヒーのことをカフィーと言ってみんなに嫌な思いをさせてしまってすみませんでした。

一同　はい、わかりました。

なかよしの会はさらに続く。

生徒Ｅ　吉田さんがよく鼻歌で『Lemon』を歌っているんですけど、微妙に音程がズレているのが米津玄師に失礼なので、やめてください。

生徒Ｆ　ズレていないと思います。

生徒Ｅ　ズレています。

生徒Ｆ　ズレていません。

佐藤　じゃあ、吉田さん一度歌ってみてください。
生徒Ｆ　♪あの日の悲しみさえ
生徒Ｅ　ズレています。
佐藤　吉田さん、ズレた音程で『Lemon』を歌うのはやめてください。
生徒Ｆ　今まで私の下手な『Lemon』で米津玄師さんに迷惑をかけてしまってすみませんでした。
一同　はい、わかりました。

佐藤、担任のもとへ向かう。

担任　佐藤さんがなかよしの会を頑張ってくれているおかげで、どんどんクラスが良くなってきたと思う。佐藤さんのやっていることはすごく立派なことだから、これからも頑張ってね。
佐藤　はい、頑張ります。

そして、またなかよしの会が開かれる。

佐藤　それでは、今週のなかよしの会を始めます。何か意見がある人は挙手してください。
生徒Ｇ　（挙手して）はい。
佐藤　はい、山田さん。
生徒Ｇ　佐々木くんがよく山口さんに向かってブスだと言っています。女の子に対してブスだと言うのは可哀相なのでやめてください。
佐藤　本当ですか、佐々木くん。
生徒Ｈ　言ってません。
生徒Ｇ　言ってました。私、ちゃんと記録しています。今週は月曜日２時間目の休み時間に「おい、どけブス」。火曜の体育の前に「げ。ブスが水着かよ」、木曜の放課後に「ブスの通ったあとはくせえ」と言いました。
佐藤　佐々木くん、謝ってください。
生徒Ｈ　（挙手して）はい。

佐藤　何ですか。
生徒Ｈ　ブスにブスって言って何が悪いんですかー？
生徒Ｇ　人が傷つくことを言ってはいけないと思います。
生徒Ｈ　でも、前になかよしの会で嘘をついてはいけないと言われました。だから、僕は本当のことを言っているだけです。
生徒Ｇ　そもそも山口さんはブスじゃないと思います。
生徒Ｈ　ブスだと思います。
生徒Ｇ　ブスじゃありません。
生徒Ｈ　じゃあ、山田さんは山口さんと顔を交換しろと言われたらできますか。
生徒Ｇ　それは――
生徒Ｈ　答えられない時点で山田さんも山口さんのことをブスだと思っていると思います。
生徒Ｇ　思っていません。
生徒Ｈ　山田さんは嘘をつきました。謝ってください。
生徒Ｇ　佐々木くんに傷つけられました。謝ってください。
生徒Ｈ　僕はブスにブスと言っただけなので何も悪くありません。
生徒Ｇ　たとえ本当のことでもブスにブスと言ってはいけないと思います。
生徒Ｈ　僕はブスだとわかっているのに嘘をついてブスじゃないと言う方がよっぽど失礼だと思います。
生徒Ｇ　ブスに生まれたのは山口さんの責任ではないので、悪く言うのは可哀相だと思います。
生徒Ｈ　そうやって上から目線で可哀相って言ってる方が失礼だと思います。
生徒Ｇ　上から目線じゃないし、失礼じゃないです。
生徒Ｉ　（手を挙げて）もうやめてください。
佐藤　山口さん。
生徒Ｉ　私が…ブスだから、悪いんです。ブスに生まれてしまってすみませんでした。
一同　はい、わかりました。

生徒たち、散り散りになる。佐藤は担任のもとへ向かう。

佐藤　失礼します。先生、今日の日誌です。
担任　ありがとう。どうだった、なかよしの会は。
佐藤　……。
担任　どうしたの？
佐藤　先生、悪いことをしたときにちゃんと謝れるのが正しい大人、なんですよね。
担任　そうよ。
佐藤　じゃあ、悪いことって何ですか？
担任　え？
佐藤　その人のせいじゃないこととか、どうしようもないこととか、いっぱいあるのに、それでも、誰かが嫌な気持ちになったり、傷ついたって言ったら、それって悪いことになるんですか？

生徒たちがまた教室に戻ってくる。いつもは佐藤がついている議長のポジションに担任がつく。

担任　今日は悲しいお話があります。先月からお休みが続いている山口さんのことですが、昨日、親御さんから連絡をもらいました。なんでも山口さんが学校に来られなくなったのは、クラスで山口さんの容姿についてみんなで悪く言ったからだ、と本人は言っているそうなんです。これは、本当なんですか。

生徒たち、黙りこくっている。

担任　佐藤さん、どうなんですか。
佐藤　え。
担任　もし本当にそんなことがあったとしたら絶対に許されないことです。佐藤さん、あなた学級委員長でしょう。何も知らなかったの？
佐藤　あの。えっと。
生徒Ｇ　佐々木くんが山口さんに対してブスと言っていました。
担任　本当なの、佐々木くん。
生徒Ｈ　はい、本当です。

担任　どうしてそんなひどいことを？
生徒Ｈ　本当のことだからです。嘘をつくのは悪いことだと前になかよしの会で言われました。
担任　それで、佐々木くんはちゃんと山口さんに謝ったの？
生徒Ｇ　謝っていません。
生徒Ｊ　謝ったのは山口さんです。
担任　どうして山口さんが？　誰がそんなことをさせたの？
生徒Ｋ　佐藤さんです。
佐藤　え？
生徒Ｋ　佐藤さんが、なかよしの会で山口さんに謝らせました。
佐藤　違います、私、そんなこと――
生徒Ｋ　私も前に納得のいかない理由で佐藤さんに謝らせられました。
生徒Ｌ　私も謝らせられました。

次々と生徒たちが「僕も」「私も」と名乗り出る。

担任　どういうことですか、佐藤さん。
佐藤　私は、ただ、先生に言われて、ただ――
生徒Ｍ　みんなの前で謝らせさせられて、山口さん可哀相でした。
生徒Ｎ　私もとても嫌な気持ちになりました。
生徒Ｏ　私もとても傷つきました。
生徒Ｐ　だから佐藤さんにも謝ってほしいです。
生徒Ｑ　ちゃんと謝罪してほしいです。
佐藤　私が…なんで、私が…？
担任　佐藤さん、あなたのせいで不快な想いをしたの。そのことについてどう思うの？
佐藤　私は、ただ正しいことをしただけです。
担任　佐藤さん、あなたのしたことは本当に正しいことなの。
佐藤　だって…先生が…。

担任　佐藤さん、謝りなさい。
佐藤　嫌です。
担任　佐藤さん。
佐藤　私は何も悪いことをしていません。
担任　謝りなさい。
生徒たち　あーやまれ。あーやまれ。

生徒たちの謝れコールがどんどん高まる。追いつめられていく佐藤。

担任　佐藤さん、悪いことをしたら、ちゃんと認めて謝れることが正しい大人になるっていうことなのよ。

追いつめられる佐藤の周りで、無責任な観客が熱狂する。それは、まるで魔女裁判の様相。佐藤が謝ろうとした瞬間、音楽が爆発する。
その狂騒から鈴木が飛び出す。

鈴木　何でこの人謝ってるの？

【第2話】「傷つけてしまって申し訳ありません」

そのひと声と共に場面が変わる。
そこは、鈴木家のリビング。朝の風景。母とテレビを見ながら朝食をとっている鈴木。流れているのはワイドショー。

鈴木の母　何が？
鈴木　だってこれ悪いことをしたのは子どもの方なんでしょ。
鈴木の母　ああ、テレビ。
鈴木　しかも、子どもったってとっくに成人してるわけじゃない？
鈴木の母　そうね。
鈴木　なのに何で親が出てきて、頭を下げなきゃいけないの。変じゃない？
鈴木の母　でも親である以上、育てた責任があるんだから。
鈴木　えー。
鈴木の母　どれだけ大きくなっても、親からすれば子どもは子どもなの。だから、子どもが悪いことをしたら親が謝るし、親が悪いことをしたら子どもが責任をとる。それが、親子なのよ。
鈴木　じゃあ、お母さんが悪いことをしたら私が謝るの？
鈴木の母　ママがひなちゃんに迷惑をかけるようなことするわけないじゃない。ほら、もう時間でしょ。早く行きなさい。

すると、場面は鈴木の通学風景に。

鈴木　私はお母さんとふたり暮らしです。うちのお母さんは気立てがよくて見た目も若くて、よくクラスの子たちも羨ましがられる自慢のお母さんです。でも、たったひとつだけ、私からするとどうしても受け入れられないところがありました。

生徒Ａ　あ、おはよう。
鈴木　おはよう。
生徒Ｂ　今週の「ハイキュー!!」見た？
鈴木　見た～。もう影日（かげひな）最高。
生徒Ａ　38ページの左上のコマがな。
鈴木　わかる。あの左上のコマで死んだ。
生徒Ｂ　古舘先生はまじで神。
鈴木　公式が最大手すぎる。
生徒Ａ　もう私、ちょっとあらぶり過ぎて、早速漫画にしたわ。
鈴木　え～見たい見たい見たい～！

鈴木と生徒Ｂ、生徒Ａのスマホの画面を一緒になって覗き込む。

鈴木　良すぎる…。
生徒Ｂ　もうこの影山の照れた顔が。
鈴木　影日の生きている世界に生まれてきて私は幸せだよ。
生徒Ａ　同じ時代に生きる奇跡な。
生徒Ｂ　感謝しかない。
生徒Ｂ　そいえば、鈴木、昨日、スイパラ行ったんでしょ。いいな～。
鈴木　え。何で知ってんの？
生徒Ｂ　流れてきたもん、ツイート。
鈴木　ああ。
生徒Ａ　（ケータイの画面を見て）今日はひなとスイパラへ。「太るから嫌～」と言いながら結局ひなが食べたケーキは13個。甘いものが我慢できないのはうちのＤＮＡかしら（とほほ）。
鈴木　いいよ、わざわざ読まなくても。
生徒Ａ　すっごい。これ、３０００いいねもされてるよ。
生徒Ｂ　すごい人気だもんね、鈴木母の愛娘ツイート。

鈴木　何がそんなに面白いの？　全然普通じゃない？
生徒Ｂ　えー。でもなんか読んでてほのぼのするよ。
生徒Ａ　こんな仲いい親子いいなって思うもんね。
鈴木　普通だよ。
生徒Ａ　いやいや普通じゃないから。高校生になって、親と一緒にスイパラとか普通行かないから。
生徒Ｂ　うちとかもうほとんど話さないよ。
鈴木　そんな仲悪いの？
生徒Ｂ　仲悪いっていうか、それが普通じゃない？　別に特に話すことないし。
生徒Ａ　親だしね。
生徒Ｂ　まさか親と推しカプの話とかできないしね～。
生徒Ａ　私、まじで親に腐バレしたら死ぬ。

生徒Ａと生徒Ｂが鈴木を置いて先に行く。

鈴木　私の母はいわゆる人気ツイッタラーというやつだ。ひとり娘の私とのやりとりをまとめたツイートが何度かバズって、気づいたらフォロワー20万人超のちょっとした有名人になっていた。

後ろから生徒Ｃがやってくる。

生徒Ｃ　おはよう。
鈴木　あ、おはよう。
生徒Ｃ　何ボーッとしてんだ。
鈴木　ううん、別に。
生徒Ｃ　変なやつ。先行くぞ。
鈴木　うん。

生徒Ｃが去っていく。それを見ていた生徒Ａと生徒Ｂが駆けつけて。

生徒Ａ　なになになに。
生徒Ｂ　いい感じじゃん。
鈴木　いやいや、何でもないから。
生徒Ａ　いつから斉藤とそういうことになってたの。
鈴木　なってないから。普通だから。
生徒Ｂ　え～、でもいいな～、斉藤って結構いいよね。
生徒Ａ　背高いし、イケボだしね。
生徒Ｂ　斉藤ってさ、どっちだと思う？
生徒Ａ　え～。攻めでしょ。
生徒Ｂ　と思わせての受けも悪くない。
生徒Ａ　悪くない～。
鈴木　変なこと言ってないで。行くよ。

鈴木と生徒Ａ・Ｂが去っていく。
別の場所から鈴木の母が現れる。アルバムをうれしそうに眺めている鈴木の母。そこへ、鈴木が家に着く。

鈴木　ただいま。
鈴木の母　おかえり。ひなちゃんひなちゃん、ちょっとこっち。
鈴木　何（と、母のもとへ）。
鈴木の母　ほら見て。これ、ひなちゃんが３歳のときの写真。
鈴木　どしたのいきなり。
鈴木の母　お掃除をしてたら、つい手が止まらなくなっちゃって。なつかしい。
鈴木　ったく。
鈴木の母　ほら見て。こっちは、お父さんがいなくなったあとの。もう 12 年になるのね（と、写真をケータイで撮影する）
鈴木　何してるの。

鈴木の母　あとでアップしようと思って。
鈴木　変なこと書かないでよ。
鈴木の母　変なことなんて書いてないでしょ。
鈴木　お母さんのツイート、友達も見てるんだから。
鈴木の母　いいじゃない、別に。

鈴木、母のもとを離れる。

鈴木の母　なつかしい写真が出てきた。これは娘が５歳のとき。夫と離婚し、塞ぎこんでいた私に娘が言ってくれた「これからはひながパパのかわりになるね」あの言葉のおかげで、私は絶望から立ち直ることができたんだ。

生徒Ｃがやってくる。

生徒Ｃ　これ、鈴木の母ちゃんのアカウントなんだって？
鈴木　斉藤くん。え？　誰から聞いたの？
生徒Ｃ　この間のツイート、めっちゃ感動した。俺も思わずフォローしちゃったもん。
鈴木　いいよ。どうせ大したことないツイートしかしないんだから。
生徒Ｃ　いいよな、母ちゃんと仲良くて。羨ましいよ。
鈴木　普通だよ。
生徒Ｃ　……今度さ、ふたりでどっか遊び行かない？
鈴木　え。
生徒Ｃ　いや？
鈴木　ううん、いやじゃない！
生徒Ｃ　じゃあ決まり。どこ行くか考えてて。

生徒Ｃ、去っていく。

鈴木の母　これは娘が7歳のとき。オネショをして泣いている顔。かわいい。

生徒Ａと生徒Ｂがやってくる。

生徒Ａ　あんた、７歳までオネショしてたの？
鈴木　は？　何の話？
生徒Ｂ　今朝、鈴木母がツイートしてたよ。
鈴木　はあ？
生徒Ａ　７歳って小２でしょ。さすがにヤバくない？
鈴木　ちょっと待って。え？　そんなことまでつぶやいてるの。
生徒Ｂ　うん、もう１万いいねとかされてたよ。
鈴木　信じらんない。私、帰る。
生徒Ａ　気にしなくていいよ、どうせ小学校の頃の話なんだし。
鈴木　いやいや、ありえないでしょ、普通に考えて。

生徒Ｃがやってくる。

生徒Ｃ　おはよ。
鈴木　…！　（小声で）おはよ。
生徒Ｃ　どした？
鈴木　いや、斉藤くん、今朝の、あれ、見た？
生徒Ｃ　あれ？
鈴木　うちの、母の。
生徒Ｃ　ああ、オネショ。
鈴木　……！（踵を返して）ちょっと私、死んでくる。
生徒Ｃ　何で？　かわいいよ。

鈴木　　え？
生徒Ｃ　　鈴木って、子どもの頃の写真、めっちゃ可愛いよな。今度うちまで見に行っていい？　アルバム。

生徒Ａ・Ｂ・Ｃ、去る。鈴木だけが残って、そこへ鈴木の母がやってくる。

鈴木の母　　あれ？　ひなちゃん、シャンプー変えたの？
鈴木　　え？　何の話。
鈴木の母　　お風呂。新しいの、あったから。
鈴木　　あ～、別に、なんとなく。いつものやつ、切れてたから。
鈴木の母　　ずいぶん高そうだったけど。
鈴木　　そうでもないって。じゃあ、私、寝るね。お休み。

鈴木、去る。

鈴木の母　　【速報】ひなに彼氏ができたかもしれない。

鈴木が登校する。別の方向から生徒Ｃがやってくる。

鈴木　　おはよう。

生徒Ｃ、鈴木を見て、踵を返す。

鈴木　　え。ちょっと待って。え。何？　どしたの？
生徒Ｃ　　いや、なんか悪いかなと思って。
鈴木　　え。何が？
生徒Ｃ　　いや、俺と一緒にいると、彼氏が嫌かなと思って。
鈴木　　だから、何の話？

生徒Ｃ　いるんだろ、彼氏。
鈴木　…はあ？
生徒Ｃ　だって、母ちゃん、ツイートしてたから。彼氏できたかもって。
鈴木　…はあ？　ないし。全然ないし。
生徒Ｃ　え、でも。
鈴木　ないないないない、本当ない。っていうか、むしろ、私が好きなのは――
生徒Ｃ　だったら、俺、なってもいい？　鈴木の彼氏。
鈴木　え？
生徒Ｃ　俺がなりたいんだけど、彼氏。

場面変わって、生徒Ａ・Ｂが飛び出してくる。

生徒Ａ　鈴木～！
鈴木　何？　どうしたの？
生徒Ｂ　どうしたの、じゃないよ。何浮かれた顔してるの？
鈴木　別に浮かれてなんかないけど。
生徒Ａ　今すぐ家に帰った方がいいよ。今日の学校は生き地獄だ。
鈴木　何？　大げさ。
生徒Ｂ　もしかして、まだ、見てないの？
鈴木　何が？
生徒Ａ　ツイート、鈴木母のツイート。
生徒Ｂ　あんた、20万人相手に腐バレされてるよ。
鈴木　え？

生徒Ａ、鈴木にケータイを差し出す。画面を覗き込む鈴木。

鈴木　娘の本棚の奥にあった漫画。抱かれたい男1位に脅されています。最近はこういうのが流行っているの

かしら？

生徒Ａ　もう 10 万いいねもされてるよ。

生徒Ｂ　あんた、もう一般の世界は生きていけないと思った方がいいかも。

鈴木　何これ。

そこへ、生徒Ｃがやってくる。

生徒Ａ　あ、おはよう。

生徒Ｃ、鈴木を見て踵を返す。

鈴木　斉藤くん。

生徒Ｃ　……ごめん、ちょっとキモイ。

生徒Ｃが去る。場面変わって、そこは鈴木家のリビングに。

鈴木　ふざけんなよ。

鈴木の母　どうしたの、ひなちゃん。

鈴木　何勝手に人の性癖全世界に向けて晒してんだよ！

鈴木の母　何怒ってるのよ、怖い。

鈴木　娘のプライベートを自分の承認欲求のエサにしてんじゃねえよ、クソババア！

鈴木の母　何て言い方するの。お母さん、そんなひなちゃん好きじゃない。

鈴木　うっせえ！　お前のせいでこっちがいつもどんだけ迷惑してると思ってんだよ！　何が愛娘ツイートだ。ろくに母親らしいこともしてないくせに、何でもかんでも美化しやがって。勝手にフィルターかけて日常補正してんじゃねえぞ！

鈴木の母　やめて、ひなちゃん。

鈴木　今すぐアカウント消せよ、こら！　今までツイートのネタにしてすみませんって謝れよ！

鈴木の母、ケータイに手を伸ばし。

鈴木の母　今夜、娘と喧嘩になりました。年頃の娘というのは難しいものです。母親として勉強の毎日です。

フォロワーたちが現れる。

鈴木　はあ？
フォロワーA　私も同じ年頃の娘を持つ身だからよくわかります。
鈴木　はあ？
フォロワーB　ひなママさんみたいないいお母さんの何が不満なんでしょうね。
鈴木　はあ？
フォロワーC　若い時分は思慮が浅く間違いを犯しやすいもの。親として毅然と臨むことも必要です。
鈴木　ちょっと待って。何で私が悪いことになってんの？
フォロワーD　きっといつかひなママさんの愛情をわかってくれるときが来ますよ。ファイト。
鈴木　うるせえ！　お前らに何がわかるんだよ！
鈴木の母　ひなちゃん。どうしてわかってくれないの？
鈴木　やめてよ。
鈴木の母　お母さんはひなちゃんのことをいちばんに考えているのよ。
鈴木　やめてって。
鈴木の母　それなのにどうしてお母さんを責めるの。
鈴木　やめてってば。
鈴木の母　お母さん、悲しい。
鈴木　……。
鈴木の母　お母さんはひなちゃんのためだけに17年間ずっと頑張ってきたのに。
鈴木　……。
鈴木の母　ひなちゃんにこんな仕打ちを受けるなんて。

鈴木　……。
鈴木の母　お母さんが悪かったのよね。お母さんがもっとしっかりしてたら、ひなちゃんの気持ちわかってあげられたのに。
鈴木　違うよ…。
鈴木の母　もしお父さんがいてくれたら、ひなちゃん、こんなふうにならなかったのに。お母さんが、お父さんに捨てられちゃったから、ひなちゃんをひとりにさせちゃったのね。
鈴木　違うよ…。
鈴木の母　全部、お母さんが悪いのよね。
鈴木　違うよ。
鈴木の母　本当？
鈴木　……。
鈴木の母　良かった。ひなちゃん、お母さんのこと許してくれるのね。うれしい。
鈴木　……。
鈴木の母　だったら、お母さんもひなちゃんのこと許してあげる。ね？
鈴木　……。
鈴木の母　だから、ちゃんと言いなさい。お母さんに許してほしかったら、ちゃんと謝りなさい。
鈴木　……。
鈴木の母　できないの。お母さん教えてきたでしょ。悪いことをしたら、何て言うの？
鈴木　……。
鈴木の母　ひなちゃん。
鈴木　……ごめんなさい。
鈴木の母　聞こえない。

鈴木が謝ろうとした瞬間、爆発する音楽。
その狂騒から高橋が飛び出す。

高橋　何でこの人謝ってるの？

【第３話】「頑張ってしまって申し訳ありません」

そのひと声と共に場面が変わる。
そこは、高橋家のリビング。朝の風景。母とテレビを見ながら朝食をとっている高橋。流れているのはワイドショー。

高橋の母　何が？
高橋　だって銀メダルだよ。世界で２番目だよ。なのに、何で謝らなきゃいけないの。
高橋の母　ああ。
高橋　てか、誰に謝ってるの。金がとれなくてすみませんって、悔しいのはこの人じゃん。何で関係ない人たちに謝ってるの。
高橋の母　なにムキになってるの。
高橋　だって。
高橋の母　しょうがないじゃない。国の代表で行ってるんだから。
高橋　代表。
高橋の母　税金で行ってるわけだし。
高橋　税金。
高橋の母　こんだけたくさんの人が応援してるんだから、そりゃ負けてヘラヘラしてたら、応援する側だってなんだそれってなるでしょ。
高橋　たくさんの人が応援。
高橋の母　ほら、もう時間でしょ。早く行きなさい。

すると、場面は高橋の部活風景に。試合終了のブザーが鳴る。

生徒Ａ　３年間、苦しいこともたくさんあったけど、みんなとバレーができて本当に楽しかったです。ベスト４まで連れて行ってあげられなくてごめんなさい。来年こそはみんなで頑張ってください。

生徒たちが解散する。

高橋　先輩たちが引退した。目標だった県大会ベスト４まであと一勝。あと一勝していれば、ベスト４だった。その瞬間から私たちの目標は決まった。来年こそは絶対にベスト４。そのために一生懸命練習をした。

生徒たちがランニングをしている。

高橋　はーい！　しっかり全力ー！

生徒たち　はい！

走る生徒たち。そこに顧問がやってくる。

顧問　こんにちは。

高橋　（誰かわからず）はい。

顧問　あ、この春から赴任してきました松本と言います。前任の井上先生に代わって新しく女子バスケ部の顧問になったので、ちょっと見学に。

高橋　あ、よろしくお願いします。

顧問　いいよ。練習続けて。

高橋　はい！

ランニングをする生徒たち。

高橋　新しくキャプテンに選ばれた私はイチから練習メニューをつくりなおした。みんなもなんだかんだ言ってついてきてくれた。今年こそは何としてでもベスト４。その目標が、私たちをつないでくれていた。

顧問がまたやってくる。

高橋　練習しちゃいけないってどういうことですか？
顧問　しちゃいけないって、言い方はないんじゃない？
高橋　だって、休みを入れろって先生が。
顧問　君、ニュース見てる？
高橋　え？
顧問　私じゃなくて、決めたのはスポーツ庁。よくニュースでやってるでしょ、運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインっていうのが制定されて、運動部は週に２日の休養日をとることになったの。
高橋　でももうすぐインターハイ予選なんです。今は１秒でも長く練習しないと。
顧問　あ、今日も17時30分までには片づけて帰ってね。
高橋　延長届けは出してますけど。
顧問　１日の活動時間は、平日では２時間程度、学校の休業日は４時間程度。
高橋　はい？
顧問　ガイドラインです。
高橋　２時間って、そんなの基礎トレやったら終わりです。
顧問　私じゃないから、スポーツ庁だから。ね、よろしく。

顧問、去っていく。

高橋　何あれ。むちゃくちゃムカつくんだけど。
生徒Ｃ　てか、１日２時間とか無理じゃね？
生徒Ｄ　無理だよ。
生徒Ｂ　どうする、高橋。
高橋　無視でしょ。関係ないじゃん、私たちには。
生徒Ｃ　でも追い出されるよ学校は。
高橋　朝練だったらいいでしょ。放課後削られた分は朝練で補おう。

顧問、やってくる。

高橋　あの。変なこと言うのやめてもらえませんか。
顧問　言ってないよ、変なことなんて何も。
高橋　１年の木村が、今度先輩に何か言われたら先生に言いなさいって言われたって。
顧問　言いましたよ。
高橋　言ってるじゃないですか。
顧問　変なことじゃないでしょう。
高橋　そんな言い方したら私たちが１年をいじめてるみたいじゃないですか。
顧問　木村さん泣いてましたよ、練習についてこれないのは、あなたの努力が足りないからだって言われたって。
高橋　当たり前のことじゃないですか。
顧問　高橋さん、部活動以外の時間にも部員に自主練を強要してるそうじゃないですか。
高橋　何の話ですか？
顧問　家に帰ったら筋トレ２セット。これじゃ勉強する時間がないって。
高橋　でも強くなるためには、そういう自主性が大事なんです。
顧問　学校の目的は部活じゃないでしょ。学業に支障が出るような内容は認められません。
高橋　でも、私たちはやってきました。
顧問　それはあなたたちの時代までの話です。そんな根性論が通用する時代は終わりました。もっと効率を考えてやらないと。あと、強要はなしで。
高橋　そんなんでどうやって強くなるんですか？
顧問　強くなってどうするんですか？
高橋　ベスト４に入るんです。
顧問　ベスト４に入って、どうするんですか？
高橋　え。
顧問　ベスト４に入って、その後の人生が変わりますか？　それで、大学に行けますか？

顧問が去る。高橋、生徒のもとへ向かう（生徒Ｄがいなくなっている）。

高橋　ダメだ、私、松本絶対無理。なんていうか人間の根本が合わない。
生徒Ｂ　つかそれより林ももう来れないって。
高橋　え。
生徒Ｃ　朝練。親にバレたらしくて。
生徒Ｂ　そんな時間があるなら勉強しなさいって。

高橋、顧問のもとへ向かう。

高橋　どういうことですか？
顧問　今度は何ですか？
高橋　次の日曜、部活は休みだって。
顧問　そうですけど。
高橋　なんとかガイドラインでは、週末の休養日は１日以上あればいいんですよね。
顧問　あ、ちゃんと勉強してきましたね。
高橋　毎週土曜は休みにしてます。何で日曜まで休みなんですか？
顧問　プライベートです。
高橋　え？
顧問　先生、今度の日曜、予定があって。だからお休みです。
高橋　何ですかそれ。
顧問　先生だってプライベートはあります。
高橋　それはわかりますけど。でも、もう再来週にはインターハイ予選が始まるんですよ。
顧問　たくさん練習をしたからってうまくなるとは限らないでしょう。
高橋　じゃあ効率的にうまくなる方法を教えてください。
顧問　先生、バスケはわかりませんから。

高橋　顧問じゃないんですか。
顧問　割り当てられたから引き受けただけです。
高橋　質を上げるには一定の量が必要だと思います。
顧問　何だか大人みたいなこと言うようになりましたね。
高橋　子ども扱いしないでください。
顧問　じゃあ、大人として聞きます。今、部活の運営が社会問題になっていますよね。そのことについてどう思いますか？
高橋　休養が必要だというのはわかっているつもりです。でも、私はもっと部活がしたいです。
顧問　あなたのその部活がやりたいっていう我儘で、先生のプライベートが犠牲になっていることについてはどう思いますか？
高橋　それは（答えられない）。
顧問　それに、部員だって必ずしもみんながあなたと同じぐらい部活をやりたいとは限らない。
高橋　そんなことないと思います。
顧問　本当に？

生徒たちが別の場所にいる。

生徒Ｄ　はい、みんなこっち。いくよー。

生徒たち、自撮りをする。

生徒Ｃ　あー、楽しい。
生徒Ｂ　私、みなとみらい来たの、初めて。
生徒Ｃ　私も。ずっと部活だったもんね。
生徒Ｄ　やっぱ休みもないとね。せっかくのＪＫだし。
生徒Ｂ　ね。次、赤レンガ行こうよ。
生徒一同　行く！

生徒たち、去っていく。

顧問　学校生活は部活だけがすべてじゃない。先生は、もっといろんなことに目を向けてほしいと思っています。

高橋　（答えられない）

顧問　高橋さん、ブラックはよくないですよ。

試合終了のブザーが鳴る。

高橋　あー、悔しい！

生徒Ｃ　高橋、落ち着きな。

高橋　だってこんなボロ負け。ありえないじゃん。

生徒Ｂ　ちょっと調子が悪かったかな。

高橋　そういう問題じゃないって。何あの後半のトス。全然周り見れないし。

生徒Ｃ　しょうがないよ、最近全然練習できてないし。

生徒Ｂ　なんかね、息が合わないっていうか。

高橋　だから、ちゃんともっと練習しようって。

生徒Ｂ　してるよ。私らだって頑張ってるよ。

生徒Ｃ　でも、正直ちょっとキツいっていうか。

高橋　え？

生徒Ｃ　毎日朝練とかさすがにね。

高橋　何テンション下がってんの。ここでそんなんだと絶対インターハイとか無理だよ。

生徒Ｂ　実際、ちょっと考えた方がいいかもよ。

生徒Ｃ　今の現状じゃベスト４に残るのとかありえないしね。

生徒Ｂ　つか、そもそもインターハイに出られるとかなら頑張れるけど、県予選のベスト４が目標でしょ。正直、それ達成したから何？　って言われたら何って感じだし。

高橋　なに松本みたいなこと言ってるの。
生徒Ｂ　別に肩持つわけじゃないけど。
生徒Ｃ　もっと自分たちらしい部活っていうのを考えた方がいいんじゃないって。

生徒去っていく。高橋、顧問のもとへ向かう。

高橋　どういうことですか？
顧問　今度は何？
高橋　どうして私がキャプテン下ろされなきゃいけないんですか？
顧問　それは私が決めたことじゃありません。
高橋　じゃあどうしてーー
顧問　みんなが決めたんです。みんなが、あなたにはついていけないって。

高橋、生徒たちのもとへ向かう。

高橋　どういうこと？
生徒Ｂ　別に高橋のやり方がダメってわけじゃないよ。
生徒Ｃ　ただ、ちょっとつけないっていうか。
生徒Ｄ　やっぱ、みんな無理してたし。
生徒Ｃ　なんか、あんまバレー、楽しくなくなっちゃって。
生徒Ｂ　だから、私たちはもっとバレーを楽しもうって決めたの。
高橋　ベスト４は？
生徒Ｂ　それよりもっと大事なことがあるでしょ。

高橋、生徒Ｂにつかみかかる。とっくみあいになる高橋と生徒Ｂを周りの生徒が慌てて止める。そこへ、顧問が入ってくる。

顧問　やめなさい、高橋さん。部活で学ばなきゃいけないことは、勝つことじゃありません。協調性です。今の君にはそれがいちばん欠けている。

高橋　私は、ただ頑張りたいだけです。

顧問　でも、その頑張りを人に強要するのは間違えている。

高橋　じゃあ、もっと頑張りたい私の気持ちはどうしたらいいんですか？　頑張りを強要するのは間違えていて、頑張らないのを強要するのは正しいんですか？

顧問　頑張っちゃいけないなんて言ってません。ルールを守りましょうって言ってるんです。

高橋　そのルールを決めたのは誰ですか？

顧問　スポーツ庁です。

高橋　当事者は私です。何でそうやって私たちのことを私たちが知らないところで決めて、それを押し付けてくるんですか？

顧問　それが、社会です。

高橋　……超絶どうでもいいわ。

顧問　高橋さん、清水さんに謝りなさい。

高橋　嫌です。

顧問　暴力をふるったことを清水さんに謝りなさい。

高橋　私は絶対に謝りません。

顧問　わかりました。だったらちゃんと非を認めて謝るまで、練習への参加を禁止します。

ひとりで練習をしている高橋。周りで、生徒たちが楽しく練習をしている。
ひとりで練習をしている高橋。周りで、生徒たちが楽しく練習をしている。
ひとりで練習をしている高橋。周りで、生徒たちが楽しく練習をしている。
試合終了のブザーの音。生徒たちがにぎやかにコートを去る。

生徒Ｂ　惜しかったよね～。

生徒Ｃ　え～。私があそこで決めてたら。

生徒Ｄ　いやいやよくやったって。

生徒Ｅ　うん、頑張った頑張った。
生徒Ｂ　あ、この後、タピオカ飲みに行かない？　新しいお店できたんだ。
生徒一同　行く～！

生徒去っていく。残された高橋。そこへ生徒Ａがやってくる。

生徒Ａ　久しぶり。
高橋　先輩。
生徒Ａ　終わっちゃったね、県予選。
高橋　すみません、１回戦負けで。
生徒Ａ　……なんか変わっちゃったね、うちの部。あ、じゃあ、私、この後、練習だから。

生徒Ａ、去る。
高まる音楽。高橋が亡霊みたいにどこにも行けずに、ただひとりで震えている。
暗転。

【第４話】「不適切な表現をして申し訳ありません」

演劇部の部室に、田中と渡辺と伊藤がいる。

渡辺　上演禁止？
伊藤　なんですかそれは。
田中　今回のお芝居を発表することを禁じるという意味ですね。
伊藤　いや、日本語の意味を聞いているわけではないです。
渡辺　何で上演禁止なのか、その理由を聞いてるんです。
田中　……高校生らしくない内容だからそうです。
伊藤　はあ？
田中　ほら、この話、裏テーマでは国際問題が入っているでしょう。
渡辺　えー、でも別にそんな目くじら立てるような内容でもないですし。
伊藤　いやいや、っていうより事実じゃないですか。それに対して、先輩がこう思うっていうことを脚本にしたんですよね。
渡辺　それが何で高校生らしくないんですか？
田中　……さあ。
渡辺　さあって。
伊藤　上演禁止って言われて、先輩は何て言い返したんですか？
渡辺　もしかしてわかりましたって、そのまま引き下がったとか？
田中　……まあ。
渡辺　先輩～！
伊藤　何で何も言わないんですか？
田中　いや、だって。
渡辺　先輩が書いたものじゃないですか。
伊藤　それを人からとやかく言われて悔しくないんですか。

田中　悔しいというのは……うーん。
渡辺　はっきりしないですね。
伊藤　で、どうするんですか？
田中　どうするとは。
伊藤　上演禁止はさすがに困るじゃないですか、大会ですよ。
渡辺　どうやったら上演できるんですか。
田中　なんか、書き直しなさいって。
伊藤　書き直すって、どういうふうに。
田中　もっと高校生らしくって。
渡辺　だから何ですか、その高校生らしいっていうのは。
田中　あくまで例ですよ。例としては、親子とか。
伊藤　はあ？
田中　将来の夢とか。
渡辺　ダメ、全然ピンと来ない。
伊藤　それって高校生らしいっていうか、大人が見たい高校生なだけじゃないですか。
田中　うまいこと言いますね。
伊藤　感心しないでください。
田中　もっと悩みとか、そういうのを打ち出した方がいいんじゃないかと。
伊藤　悩み。
渡辺　んなこと言われてもねえ。
田中　何か悩んでいることあります？
渡辺　いきなり聞かれても。
伊藤　先輩、何かあります？
田中　うちの父親が……。
伊藤　はい。
田中　朝のトイレが長い。
伊藤　……演劇にはなりませんね。

田中　ならないですよねえ。
渡辺　もっと他にないですか？
田中　あ。
渡辺　はい。
田中　うちの父親の。
伊藤　はい。
田中　寝間着がジェラートピケ。
渡辺　オトウサンカワイイ～。
田中　あと、うちの父親が。
伊藤　もういいです、うちの父親シリーズは。
渡辺　すごく幸せな家庭だということは伝わりました。
田中　困りましたねえ。
伊藤　てか、なんかその悩みを書けみたいな方向性がダサくないですか。
田中　ダサいですか。
伊藤　ありきたりっていうか、高校生は悩んでいるっていう前提で進んでるのがキモい。
渡辺　わかる。
田中　伊藤さんは悩みはないですか？
伊藤　なくはないです。でも、そういうのを演劇にするのは違うっていうか。
田中　違う。
伊藤　何だろう。自分の悩みを、盛り上がりやすいネタか何かに置き換えている感じがする。
渡辺　しかもそれが一時間の劇で解決するとか。
伊藤　ないね。
渡辺　ないない。
伊藤　そんなんだったら悩まないっつーの。
田中　確かに言う通りかもしれません。
伊藤　てか、そもそも書き直しに応じるつもりですか。
田中　応じないという選択肢がありましたか。

渡辺　ありますよ。
伊藤　表現の自由です。それに規制をかけるなんて変じゃないですか。
渡辺　私、先輩の書いた台本、結構好きですよ。ちょっとわけわかんないところもあるけど、私はこれがやりたいって思いました。
田中　ありがとうございます。
伊藤　やりましょうよ、この台本で。
田中　ですが。
伊藤　先輩、表現の自由です。

日が変わる。

伊藤　謝罪？
渡辺　なんですかそれ。
田中　すみません。
渡辺　いやいやいや先輩が謝るんじゃなくて。
伊藤　何で謝罪をしなきゃいけないんですか。
田中　やはり台本の内容が悪かったそうです。
伊藤　はあ？
田中　で、問題がエスカレートして、台本を校長先生が読んだそうなんです。
伊藤　はい。
田中　それで、これは学校の名誉を毀損する内容だと。
渡辺　キソン。
伊藤　学校をディスったってこと。
田中　で、呼び出しを受けまして。
渡辺　先輩が？
田中　はい。
伊藤　で、謝らされたんですか。

田中　いや、その場では僕もこう反論といいますか、言ったわけです、自分の考えを。
渡辺　カッコいい。
伊藤　やるじゃないですか、先輩。
田中　そしたら、その内容がまた校長の逆鱗にふれまして。
伊藤　何て言ったんですか。
田中　誰もが認めるものじゃないとやっちゃいけないなんて、戦前の軍国主義じゃないですかと。
伊藤　それが。
渡辺　ゲキリン。

部員の間にセーフかアウトか微妙な空気が垂れ込める。

伊藤　どうします？
田中　考えています。
渡辺　謝罪をしたら上演してもいいんですか。
伊藤　でもそれは表現の自由に対する侵害です。
田中　表現の自由は公共の福祉の制約を受けるものだと。
渡辺　それ、授業で習った気がします。
田中　だから、公序良俗に反するものは認められないと校長は言っています。
伊藤　私は先輩の書いたものが公序良俗に反するとは思えないんですけど。
田中　それは人によるんだと思います。
伊藤　だったらなおさら引き下がるべきじゃないと思います。
渡辺　でも、謝罪をしなきゃ大会に出られないんですよね。
田中　はい。
渡辺　私は、劇がしたいです。そのために演劇部にいるんだし。
田中　そうですよね。
渡辺　いいじゃないですか。とりあえず謝罪して、台本書き換えましょう。
伊藤　渡辺。

渡辺　高校生らしいってやつをやって、それで認めてもらえるなら、別にそれでよくないですか。
伊藤　渡辺だって意味わかんないって言ってたじゃない。
渡辺　わかんないけど、ここで抵抗したって、それこそ意味なくない？
伊藤　そんなことーー
渡辺　いいよ。頭下げて解決するなら、それで。わかったふりして、反省したふりして、それでみんな納得するんなら、そっちの方がよっぽど賢くない？

日が変わる。

伊藤　なに書いてるんですか？
田中　謝罪文です。
渡辺　謝罪文？
伊藤　それって校長先生の？
田中　お昼の 12 時までに出しなさいって。
渡辺　もう全然時間ないじゃないですか。
田中　これを校長先生に提出して、上演の許可をもらいます。
伊藤　本当にそれでいいんですか？
田中　いいじゃないですか。頭を下げても死ぬわけじゃありませんし。

田中、原稿用紙にペンを走らせる。

渡辺　なんて書いてるんですか？
伊藤　（覗き込んで）このたびは私の短慮な台本により学校関係者のみなさまに多大なるご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございません。
渡辺　固くないですか？
田中　そうですか？
伊藤　すべては私の不徳の致すところであり、慚愧に堪えません。

渡辺　先輩、意味わかって書いてます？
伊藤　このような事態を引き起こし、先生方の信頼を裏切るかたちになったこと、誠に遺憾に思います。
渡辺　先輩、これ絶対コピペでしょう？
田中　バレましたか？
渡辺　バレますよ。何の気持ちも入ってないじゃないですか。
伊藤　とりあえず難しい言葉使っとけ感がすごいです。
田中　ですが、謝罪会見で謝っているえらい人もだいたい似たようなことを言ってましたよ。
渡辺　たぶん先輩のそういう感じが校長先生を怒らせたんでしょうね。
田中　困った話です。
伊藤　あ～、もうしょうがない！　私たちも書こう。
渡辺　え？　何で？
伊藤　先輩ひとりに任されたら、また校長を怒らせるだけでしょ。
渡辺　確かに。
田中　ごもっともです。
伊藤　３人合わせれば文殊の知恵。３人で書けば、それらしいものになるって。
田中　いいんですか？　謝ることになって。
伊藤　プライドよりも、みんなで大会に出る方が大事です。

田中、伊藤、渡辺、目を合わせて頷く。

【最終話】「あやまらない」

その瞬間、どこからか佐藤が立ち上がる。

佐藤　謝るな！
田中　え。
佐藤　そんな簡単に謝るな！
伊藤　誰？

どこからか鈴木が立ち上がる。

鈴木　自分が間違えてると思ってないなら、謝るな！
渡辺　何？　なになに？　これ。
伊藤　え。何がどうなってるの。

鈴木と佐藤が割り込んでくる。

佐藤　悪くないじゃない別に。悪いこと何もしてないでしょ。
田中　しかし学校の名誉を毀損する内容だと。
佐藤　あなたは、学校の名誉をおとしめることを目的に書いたんですか。
田中　違います。
佐藤　だったら、毅然とすべきです。自分が間違っていないと思うなら、毅然としていてほしいです。
伊藤　っていうか、だから誰？
鈴木　うるさいな。そこはもういいでしょ。
伊藤　えええええ。

どこからか高橋が立ち上がる。

高橋　謝った方がいいと思う。

渡辺　また何か来た〜！

高橋が割り込んでくる。

高橋　謝りたくないって、そんなのただの意地でしょ。それで、あとで後悔するのは自分だよ。

鈴木　はあ？　そんなことないし。っていうか誰？

高橋　うるさいな。そこはもういいでしょ。

鈴木　ええええ。

伊藤　なんでそこでもめてるんですか。

佐藤　どうして謝った方がいいって思うんですか？

高橋　そりゃ確かにここで謝らないって突っぱねた方がカッコいいよ。主人公って感じするよ。でも、実際はそんなうまくいかないんだよ。

佐藤　どういう意味ですか？

高橋　これで謝らなくて、本当に上演禁止になったら後悔しない？　たった1回の大会を、自分のプライドで潰して耐えられる？

田中　どうでしょう……。

高橋　いいんだよ。適当に謝ってれば。心になくたって、相手にはわかんない。こっちが謝ってやったって、こっそり舌出して、相手のことなんて馬鹿にしてればいいの。

佐藤　でも、そっちの方が後悔しないですか。自分の気持ち押し殺して、言いなりになって。そっちの方が悔しくないですか？

田中　悔しい……うーん。

高橋　ああもうはっきりしないなあ！

渡辺　はっきりしないんですこの人は。

田中　すみませんはっきりしなくて。

鈴木　質問ですけど。
田中　はい。
鈴木　そもそもなんでそんな面倒くさいお話を書いたんですか。
田中　なんで。
高橋　そこもはっきりしないの。
渡辺　はっきりしないんですこの人は。
鈴木　いや、もう全然こだわりがないなら確かにおとなしく書き換えたらいいと思いますけど。
佐藤　ダメです。
鈴木　何で。
佐藤　そうやって相手の思う通りになること自体が負けだからです。
渡辺　いや、勝ち負けの問題じゃないと思うんですけど。
佐藤　負けです。だって、それで謝ったら叩く方は余計に自分が正しいことをしたって思い込みます。そしてそれがどんどんエスカレートして、そのうち謝らせることじゃなくて、自分が正義の立場に立つために、どんどん人を叩くようになる。気持ちいいですから、自分が正しいことをしてるって思えるのって。
高橋　何でそう言えるの？
佐藤　私がそうだったからです。自分が一度間違えたから、よくわかるんです。
鈴木　で、周りは周りで叩かれるのが嫌だからとにかく先に何でも謝ってすませようとする。
佐藤　はい。今回のこともそうだと思います。
渡辺　どういうことですか？
伊藤　わかった。つまり学校側が先輩の書いた台本の内容を問題にしているわけじゃなくて、誰かが先輩の書いた台本を見て、これは不適切だって叩きはじめると面倒だから、その前につぶしておけってこと？
佐藤　問題なのは、謝りすぎなことじゃなくて、謝らせすぎることなんじゃないですか。
伊藤　そんなのおかしいですよ。先輩、やっぱり謝っちゃダメです。
田中　ええ…。
高橋　でも謝って話がうまくいくなら、それでいいじゃない。
佐藤　本当にそう思いますか？

高橋　そうだよ。謝ることは、自分の身を守る方法でもあると思う。
佐藤　本当にそれで平気でいられますか？　それで傷つかずにいられますか？
渡辺　そんなに大げさにならなくても。とりあえず謝っておけばいいんですから。
佐藤　私もそう思いました。この場をおさめるためにも、とりあえず謝っておこうって。でも！　（胸を掴んで）ここにずっと残っているんです。あのときのみじめな気持ちとか、頭を下げた瞬間、喉がつまって、息が苦しくて。あのとき、私、初めて神様にお願いしました。顔を上げたとき、目の前のみんながいなくなってくれますようにって。
伊藤　……。
佐藤　全然とりあえずなんかじゃなかった。もっと、自分を大切にしてあげればよかった。
高橋　……。
佐藤　だから謝っちゃダメです。謝らないでください。
渡辺　（佐藤の気迫を受け止めきれず助け舟を求めるように）先輩。
田中　どうしましょう。
高橋　別にいいんじゃない、それぐらいのこと。

一同、高橋を見る。

高橋　それですむなら安いもんでしょう。
佐藤　それは、あなたが他人事だから言える――
高橋　私は何回も後悔した。何回も何回も後悔した。あのとき謝っていればどうなっていたんだろうって。みんなと仲良くバレーやって、みんなと一緒に大会に出て、青春最高とか言ってインスタに仲良く写真あげてたのかなって。
佐藤　……。
高橋　謝らなかったからって何にもいいことなんてなかった。友達もみんないなくなって、試合も出られなくて、あんなにバレーのこと好きだったのに、見るのも嫌になって。自分のプライドなんて守ったって、他に何にも残らなかったら意味ないの。そんなのただの独りよがりだよ。
鈴木　……。

高橋　意地張っても後悔するのは自分だから。ちゃんと謝った方がいいと思う。
渡辺　先輩、どうします？
伊藤　謝っちゃダメです。
田中　あ、はい。
渡辺　でも謝らないと劇ができないんですよ。
田中　あ、はい。
伊藤　でも謝ったら絶対後悔することになりますよ。
田中　あ、はい。
伊藤＆渡辺　先輩！

鈴木、机の上に謝罪文が書かれた原稿用紙をひったくる。

鈴木　これがなかったら謝れないってことだよね。
渡辺　ちょっと何するんですか。

鈴木が原稿用紙を破ろうとするのを渡辺が必死になって止める。

鈴木　（以下、取っ組み合いになりながら）離して！
渡辺　ダメです！　それがないと私たち劇ができなくなるんです！
鈴木　でも、それで劇をやって、本当に自分たちの劇って言えるの？
渡辺　どういう意味ですか？
鈴木　謝って、書き直して、それで自分たちのやりたいことがやれたって言えるの？
渡辺　それはわからないですけど。
鈴木　じゃあダメじゃん！

鈴木、渡辺の制止を振り切って、原稿用紙を胸に抱える。

鈴木　私、お母さんに謝るたびに、どんどん自分を奪われる気がしてた。ごめんなさいって謝るたびに、私の大切なものも全部お母さんに明け渡して、自分がからっぽになっていく気がしてた。私はお母さんのものじゃないのに、どうしてもそのひと言がお母さんに言えなかった。

佐藤　……。

鈴木　そういう自分が嫌いだった。謝ってばかりの自分が嫌いで、自分のことを嫌いにしかなれない自分が大嫌いだった。

伊藤　……。

鈴木　守ってよ。自分たちのやりたいことぐらい、自分たちで守ってよ！

田中　やりたいこと…。

伊藤、鈴木の前に立つ。

伊藤　ください、それ。

鈴木、伊藤を見る。そして、胸に抱いていた原稿用紙を伊藤に手渡す。

伊藤　私、プライドなんてどうでもいいと思っていました。それより上演することの方が大事なんだって。（佐藤と鈴木を見て）でも、それだけじゃダメなんですよね。

伊藤、田中の前に立つ。

伊藤　私は、先輩の劇がやりたいです。私は学校のためとか校長先生のために劇をするんじゃありません。先輩との最後の大会だから、先輩の書いた台本でやりたいんです。

鈴木　いいの、それで。

伊藤　はい。

佐藤　（渡辺に）あなたは？

渡辺　難しいことはわかんないですけど、私は、後悔、したくないんです。あとでやっぱりああしておけばよ

かったって、そういう人生は嫌なんです！
高橋　だったら。
渡辺　だから、やる。好きだから、先輩の台本。で、怒られて、ダメになったら、みんなで校長先生ぶっ飛ばしてやりましょう。
高橋　バカじゃない。
渡辺　あ、そのときはまた出てきて助けてくださいよ。なんか喧嘩強そうだし。
高橋　はあ？

空気が和らぐ。

伊藤　あとは先輩ですよ。先輩はどうしたいですか？

田中、黙り込む。気まずい空気。しびれを切らした伊藤が大声をあげる。

伊藤　何で黙るんですか！
田中　すみません。
伊藤　謝ってほしいんじゃないんです。私は先輩が何を考えているのか聞きたいんです。
佐藤　何か言えない理由があるんですか？
田中　そういうわけじゃないんです。ただ。
鈴木　ただ…？
田中　その。
高橋　その…？
田中　…だから。
伊藤　先輩、とりあえず大きな声を出しましょう。
田中　しかし。
伊藤　ちゃんと声出さきゃ何考えてるかなんて伝わらないですよ！
田中　伊藤さんは、声が大きいですね。

伊藤　発声してますから、毎日。

渡辺、たまらず声を張り上げる。

渡辺　あめんぼ あかいな あいうえお。うきもに こえびも およいでる。

高橋　何いきなり。

渡辺　発声です、先輩。

田中　え？

渡辺　あめんぼ あかいな あいうえお。うきもに こえびも およいでる。

伊藤が加わる。

伊藤・渡辺　かきのき くりのき かきくけこ。きつつき こつこつ かれけやき。

田中以外のみんなが一緒に発声練習をする。

一同（田中以外）　ささげに すをかけ さしすせそのうお あさせで さしました。たちましょ らっぱで たちつてと。とてとて たったと とびたった。

一同、田中に誘いかけるように発声練習をする。

一同（田中以外）　なめくじ のろのろ なにぬねの。なんどに ぬめって なにねばる。はとぽっぽ ほろほろ はひふへほ。ひなたの おへやにゃ ふえをふく。まいまい ねじまき まみむめも。うめのみ おちても みもしまい。やきぐり ゆでぐり やいゆえよ。やまだに ひのつく よいのいえ。らいちょうは さむかろ らりるれろ。れんげが さいたら るりのとり。わいわい わっしょい わいうえを。うえきや いどがえ おまつりだ！

伊藤・渡辺　先輩！

田中　……あああああああああ！
渡辺　声、でかいです。
田中　……2年生なんで。
鈴木　私、久しぶりにこんな大きい声出した。
佐藤　気持ちいいですね、声出すのって。
高橋　（鈴木に）すごい変な顔になってたけどね。
鈴木　はあ？　なってないけど！

佐藤と鈴木と高橋が騒ぐ。

渡辺　（田中に）ちょっとははっきりしました？
田中　何か自信がなかったんですよね。
伊藤　自信？
田中　たとえばこんなことを考えているというのがあったとしても、それが間違えてたら恥ずかしいなとか。
　　そんなのおかしいって否定されたら怖いなとか。
伊藤　そんなこと言わ（と、考える）。
渡辺　もしかしたら言ってたかもしれません。
田中　でもだからって黙っててもしょうがないんですよね。間違ってたとしても、声に出さないと。
鈴木　あ、もうすぐ 12 時だ。
佐藤　時間ですね。

伊藤、原稿用紙を田中に向かって差し出す。

伊藤　どうしますか、先輩。

田中、原稿用紙を受け取る。
フラッシュの放列。まるで謝罪会見のように、原稿用紙を読み上げる田中。と、思いきや用紙を手に置く。

田中　あるところにＮくんとＫくんがいました。ＮくんはＫくんをいじめていました。Ｋくんは謝罪を要求し、ＮくんはＫくんに謝りました。ところが、それから何年経ってもＫくんは何かあるたびに、いじめられた過去をＫくんに蒸し返しました。ＮくんはそのたびにＫくんに謝りましたが、いつまで経っても許してもらえません。30歳になっても、50歳になっても、74歳になった今も、ことあるごとにいじめた罪につけこまれ、Ｎくんの子どもも、孫も謝らされるのでした。これが、僕の書いた台本です。

他の５人も原稿用紙を読み上げる。

伊藤　正直、すごく深い問題意識があって書いたわけではありません。

渡辺　何となく面白いかなと思って書きました。

佐藤　覚悟という意味では足りなかったのかもしれません。

鈴木　自分の書いたものがどんなふうに人に伝わるのか。

高橋　その点に関して配慮が足りませんでした。

田中　申し訳ありません。

一同、頭を下げる。強い光。強い音楽。世界が変わる。

田中　でも。

一同、顔を上げる。

田中　でも僕は何があってもこの劇を上演します。先生の言う通りに書き直しはしません。ちゃんと自分たちで考えて、自分たちで答えを出します。これは僕たちの劇だから。

高鳴る音楽。その中で、佐藤が、鈴木が、高橋が、田中が、伊藤が、渡辺が、何かに抵抗するように、何かを主張するように暴れる

佐藤　（笑顔で）あのときみんなの言う通りにするしかできなかった私――！　大切にしてあげられなくてごめんなさい！

鈴木　（笑顔で）ずっとお母さんの顔色ばっかり気にしてた私――！　守ってあげられなくてごめんなさい！

高橋　（笑顔で）意地張って後悔した私――！　最高の青春にできなくてごめんなさい！

わけもわからず大声で叫ぶ６人。走ったり、転んだり、ぶつかり合ったりしながら笑いあっている。叫び終わった６人が一列になって並んでいる。

一同　ありがとうございました！

一同、頭を下げる。謝罪会見ではない、感謝のカーテンコールとして。

そのままゆっくり幕が下りる。

〈幕〉